鎌倉市中央図書館
近代史資料室だより
第７号

鎌倉市中央図書館
近代史資料担当
鎌倉市御成町 20-35
電話 0467（25）2611

目次

◆研究ノート⑤「岩瀬村の小名について」……１
◆「鎌倉絵図」を再現……１０
◆古文書紹介（二階堂小牧家文書から）……１１
◆図書館デジタルアーカイブ……１２
◆古写真―泉ヶ谷に住む貿易商の庭……１３
◆モニュメント⑦「ドイツカシワの木」……１６
◆追悼　加藤茂雄さん……１６
◆インタビュー（むかし語り）⑦……１７
「笹目の谷に住んで」　中山尚彦氏
◆寄贈資料紹介・後記……２０

≫研究ノート≪⑤

岩瀬村の「小名」について

玉縄歴史研究会例会（２０２０年１２月６日）において栗田洋二氏（古文書の会会員）が発表された「岩瀬村の小名」を中心に報告します。

【１】地域に残る小名（こな）の歴史

小名の定義について

○字之事　是は田畑其外山林野地等にても、地所の小名を字（あざな）と云、口にて言ふときは名所（などころ）とも小名（こな）とも下げ名ともいへども、帳面証文等に認るには字と書くことなり（『地方凡例録』　寛政６年）

○字　明治２２年の市町村制の実施に伴い原則として江戸期の村名を大字（おおあざ）とした。江戸期の検地帳などに小名・下げ名・一筆書きなどといわれた耕地名は、大字に対して小字といわれるようになった。明治６年の地租改正以後、字名を局部地域ごとに、土地区画を示境界とその番号、地目をまとめたものが地籍図とよばれる。（『角川日本地名大辞典』）

○旧来の地名には、各町村の下に必ず字と小名とがあった。字名は公称に用い、小名は便宜上俗唱したものとも言えるもので、一村内に百余の小名を数うる事は珍しからぬところもある。例えば一屋敷、一畝歩の地にも小名があり、各独立の地名を有すること実に多様であったのである。（中略）其の場所の周囲の状況や伝説・存在物・旧跡などから名付けられたものが多く、（中略）その時の必要に応じて便宜上に呼びなされて来たものであって、（中略）明治維新の後に地租改正が行われた時には、従来の小名や字名が余りにも多いところから、その繁に苦しむほどであったので、その整理を行い（後略）（『横浜市史稿　地理編』昭和６年）

　このような「小名」の定義からも、土地の歴史や形状から名付けられた個々の地名は、明治以降の土地政策や税制の変化の中で消えていったことが想像される。

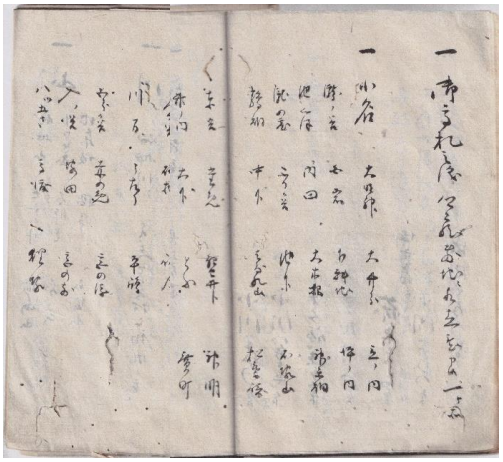
　左の図は、昭和２年出版「地番反別入図」に書き込まれた岩瀬村（現在の鎌倉市岩瀬地区）内の当時の「字」名である。８つの「字」に絞られている。田畑・宅地・山の一筆ごとに付与された小名は、すでに番号に置き換わっている。しかし、日常生活には局地的な地名がまだ使われていたはずである。そのかつての小名の範囲を地番と照合して特定するのが、本稿の目的である。

CPC の会編『（続）鎌倉 谷戸の記録 上』ｐ86 より

「近代史資料室だより」は、鎌倉市図書館ホームページではカラーでご覧いただけます。

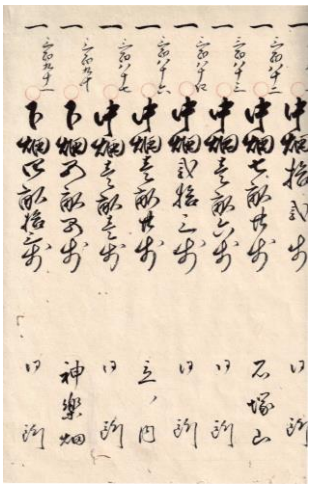
「小名」記入の例

○「文政七申年八月林大学頭様御改
地誌御調書上帳控　鎌倉郡岩瀬村」
栗田家文書



46の小名が書き上げられている

○「慶応四年戊辰年三月吉日
相州鎌倉郡岩瀬村畑方名寄帳　下」
下段に「石塚山・立ノ内・神楽畑」の小名が畑一筆ごとに記されている。



明治初期の土地制度と税制の変化概要

明治政府樹立の根幹は土地と人民の全国的把握であった。新たに「戸籍簿」を作り、土地を実測し、一筆ごとに所有者と地価が確定され、地租を獲得する道を開いた。その過程で付与された土地の小名の変遷を追い、昔の地名について考えたい。左の表によって、目まぐるしく変わる法制度を概観した。（資料室平田記）

年代	事項名	内容
明治５（1872）	７月「壬申地券」交付（大蔵省達）（所有者申告制・従前の検地帳名寄帳記載の反別使用）	旧字名記載　地引帳・地引絵図作成　地区に番号付け各筆に地番付与
明治６（1873）	７月地租改正法公布	一筆ごとに実測し面積確定、地番付け直し地引絵図作製字を規模により再編し、字番号・字名と地番付与
明治７（1874）	更正地図作成 神奈川県内大区小区制施行 地籍編製事業（内務省通達）	地押し丈量（～明治13） 岩瀬村（第16大区第10小区） 官有地も測量
明治８（1875）	改正地券発行	地目・反別・代価・地租額・持主名・地所所在の字・地番記載
	６月「皇国地誌編集例則」布達	「字地」の項目あり　旧字を合併し新字に編成　旧字と現字を並記の例もあり 旧字名（小字名）が公簿上から姿を消す
明治11（1878）	三新法体制施行（「郡区町村編成法」）　大区小区制廃止	従来の町村が新しい行政単位として復活　行政の末端単位となる
明治12（1879）	３月内務省（地理局）「達」	地租改正以前称呼の旧字取調べ指令
明治17（1884）	十七年改正体制 ５月「区町村会法」改正	連合村体制　連合戸長役場制（500戸単位） 戸長（民選から官選へ）
明治18（1885）	２月「地押調査ノ件」府県へ訓令	
明治19（1886）	８月「登記法」制定	
明治22（1889）	３月土地台帳規則公布（地券廃止）	「字」単位の簿冊作成
	４月「市・町村制」施行（町村合併）	全国町村数71,314→15,820 合併した旧村は「大字」に

参照：『公図読図の基礎』（佐藤甚次郎著1996年）

【2】岩瀬村の小名について（栗田洋二）

史料をもとに小名の場所と範囲を特定する。

1　鎌倉郡岩瀬村の小名

文政７年、幕府は地誌編纂事業として相模国の廻村調査に入っている。この調査に応じて、鎌倉郡岩瀬村が差し出した「地誌御調書上帳控」がある。「文政七申年八月　林大学頭様御改　地誌御調書上帳控　鎌倉郡岩瀬村」とあり、本史料は「新編相模国風土記稿」の資料として作成提出されたものとある。この書上帳には村の位置、戸数、山川、社寺などいろいろな事柄が記述されている。小名については４６ヶ所の小名が書かれているが、風土記稿には瀧ノ台、瀧ノ谷、五郎ヶ谷、入ノ谷、ふりヶ谷の５ヶ所の小名のみが取り上げられている。昭和４０年代から纏められた『鎌倉市史近世史料編第一』にもこの書上帳の書き下しが以下のように記載されている。

「滝ノ谷、池くぼ、滝の台、鶴畑、東谷、竹ノ内、堰場、とつくり谷、川間、五郎ヶ谷、入ノ谷、八ッ五さ、大明神、白岩、内田、ふりヶ谷、中下、堂免、大下、下セき、砂押、うたり、赤の免、塚田、高渡、大井分、下耕地、大木根、池下、はなれ山、墾井下、とふ、東ノ田、嶋合、平嶋、宮の後、宮の前、狸塚、立ノ内、坪ノ内、神原畑、石塚山、松葉崎、神明、広町、鳥井戸」

2　小名の洗出し

次の６点の史料を調査することが出来た。

①「大長寺領　御縄打水帳」天正２０年（1592）　岩瀬村の小名が記述されている最も古い古文書。大長寺は天正１９年に徳川家康から朱印地５０石を拝領している。家康が秀吉の指示の下、寺社領の検地を行ったもの。朱印地５０石拝領については「天文年中北条家ゟ御寄付之領地玉縄村ニ有之候処天正年中依願　権現様ゟ岩瀬村之内ニ而拝領仕候」とある。（「大長寺由緒書」文化１１年（1814））

②「岩瀬村御検地帳」延宝６年（1678）　徳川幕府が岩瀬村に行った検地。田畑（筆数：田690、畑494）は各筆毎に広さ・名請人が記載され、数筆毎に纏められた小名が書かれている。村役人５人が代官成瀬五左衛門及び手代８名を案内している。岩瀬村の石高は４９５石８斗２升２合となっている。（田畑の縦横の長さが書かれ、「歩入り」として広さの調整がされているものが少なからずある。田：36/690、畑68/494、但し、山林については書かれていない。）

③「岩瀬村御検地帳（四給分割後）、岩瀬村分郷帳下」寛政５年（1793）　岩瀬村が旗本三氏（木原、菅谷、小浜）と川越藩（松平）の領地に四分割され、各氏の領分を示したもの。検地帳は田畑数筆毎に纏められた小名が書かれている。分郷帳には各名請人の田畑が書かれ各筆毎に小名が書かれている。また、延宝年間より幕領の山検地は行われていたようだが（横浜市編『横浜市史１』）、この分郷帳の冊末に山年貢が永高で書かれ、換算され石高に加算されている。

④「岩瀬村木原知行地田畑方名寄帳」文化６年（1809）　旗本木原氏の領地の各名請人毎に請けた田畑を記載したもの。村の管理資料で領主に差出す義務はない。田畑各筆毎に小名が書かれている。享和３年には旗本木原氏からの度重なる取立金（年貢先納金）に対し何とかそれを踏み倒されないように木原本家の保証を取付けておこうと訴訟を起している。同年には麻疹が流行し、訴訟中出向いていた名主が、父重病のため帰村すれど、直ぐに呼出され、手鎖宿に止め置かれたとある。（『茅ヶ崎市史』１資料編（上）古代中世近世編）

⑤「岩瀬村名寄帳」天保４年（1833）　文化８年には五社稲荷を両郡（鎌倉郡・三浦郡）の祈祷所にせよと申渡され、文化１１年に幣殿、拝殿を造営している。（平嶋神社建立之事）　文化９年には異国船漂着の節心得方条目が申渡され、不時之節には岩

瀬村から６３人が駆付けると申出ている。（『神奈川県史』資料編１０近世７）

岩瀬村が川越藩領であった天保２年に藩は利根川の流路改良を行っており、天保４年には飢饉があり、年貢の増加など藩の財政がかなり切迫していたことが窺える。文政・天保年間に海防に関わる申渡しが名主等に数多く出されている。嘉永５年には川越藩から水主差配小役人並取扱　御改革小組合総代として栗田氏は禄高二人扶持に仰せつけられている。（『前橋市史』松平家「子給帳」）　その後、安政元年には熊本藩細川家、文久３年には佐倉藩堀田家の預所となり、慶応３年には幕府の代官の所管となる。

⑥「岩瀬村田畑方名寄帳」慶応４年３月（1868）　慶応３年１０月に大政奉還が行われ、慶応４年６月には神奈川府（９月に神奈川県に改称）になった。旗本領・寺社領は県の管轄になる。天保４年の名寄帳まで書かれていた「雪ノ下分・隠居免分・御神領分・八丁堤分」などの幕府、藩、寺社に関わる領分を示す記載がなくなっている。

３．洗い出された小名

これらの史料をもとに洗い出した小名は全部で１２６ヶ所になる。現在でも使われている地名は瀧の谷、下関、砂押、離山、平嶋、前山、大明神くらいである。

門前崎（上田１２筆、中田６筆）、うたり（上田８筆、中田３筆）、さ口の前（上畑２筆）、狸塚（上畑２筆、中畑９筆、下畑４筆）	離山、大木下、おけや、砂押、うたり、赤の免、椀免、塚田、内馬渡り、下セキ、堂免、内田、屋敷添、前田、太子ノ前、外屋敷、権現ノ谷、竹ノ内、東ノ前、セキ場、徳利谷、五郎ヶ谷、入ノ谷、鳥井戸、どぶ、大門崎、どぶ、東、さがり、外馬渡り、笠間境、嶋合、平嶋、宮ノ前、宮ノ後、石塚、大門崎、屋敷添、ふりヶ谷、前田、滝ノ谷、瀧ノ台	下砂押、池下、大道端、大木根、上棚、大竹分、くぼつ田、二反町、小じゃ分、土器田（かわらけ田）、みのふ堂、砂押萱野仕込、下セキ台、切通し、社宮司、鍵田、苗場、阿弥陀堂前、地蔵堂前、白岩、八っおさ、東ノ下、今泉古堀、地蔵坂、上どぶ、定使免、宮ノ前、どぶ長田、丸田、東ノ田、どぶ塚田、沓田、蟹井戸、四つ辻、笠間境、神明、坪ノ内、公田分平嶋、神楽畑、立ノ内、松葉崎、辻井戸、西念寺前、寺中、瀧ノ前、池久保、池久保森下、腰廻り、じじい畑、ふじ塚	みょうがくぼ、大舟堰、寺の前、大せと、古屋敷、川端、竹ノ内堀合、前山、大明神、薬師堂脇	大田、せき下、金井分、どぶ大田、立ノ内堀合
①大長寺領　御縄打水帳　天正２０年（1592）小名４ヶ所	②岩瀬村御検地帳　延宝６年（1678） 記載されている小名４２ヶ所	③岩瀬村御検地帳（四給分割後）、岩瀬村分郷帳下　寛政５年（1793） 記載されている小名５１ヶ所（①、②を除いて新しく見出されたもの）	④岩瀬村木原知行地田畑方名寄帳　文化６年（1809年） ④記載されている小名１０ヶ所（①、②、③を除いて新しく見出されたもの）	⑤岩瀬村名寄帳　天保４年（1833年） ⑤記載されている小名５ヶ所（①、②、③、④を除いて新しく見出されたもの）

大木下新道、やり田、下耕地、又幾田、新道、下セキ川端、竹ノ内堀端、八幡場、徳利谷山ノ根、東田長町、嶋合神明、辟畑、石塚山、椎木口、社宮前、稲荷谷、鶴畑、白石

⑥岩瀬村田畑方名寄帳　慶応４年３月　記載されている小名１８ヶ所（①、②、③、④、⑤を除いて新しく見出されたもの）

洗い出された小名　①～⑥は前記史料番号

小名の由来については、ほとんどが不明であるが、幾つかの小名の由来が推量される。

社宮司：今は衰えてしまった土地の神で、信州の諏訪が根源で東部にしかない。検地に使われる間竿がその神体とも言われる。（柳田國男氏）ミシャグジと読み、御左口神、或三宮神、或社宮司、或社子と書く。村の鎮守大社の戌亥にあるべしとある。（「諏訪旧蹟誌」）

みのふ堂：村では身延山に参詣しており、行けなかった村人が参拝した御堂か。（「身延山参詣入費」明治２８年（1895）鈴木家文書）

大舟堰：砂押川に堰を作り、大舟村に分水した場所。堰での分水で大舟村と争いを起している。（岩瀬村「御領主様用書控」文化１２年（1815））

蟹井戸：笠間村と土地の境界や用水のことで争いを起している。ここに蟹井溝の名が出ている。（岩瀬村「御領主様用書控」享保１３年（1728））

大道端：鎌倉から小袋谷を通り、離山を抜けて戸塚に行く鎌倉街道のことか。

椎木口：公田村、桂村との境界地。椎郷が広く使われているが、椎古・椎木とも書かれる。この箇所は３ヶ村の入会地があり、入会地の一角に明治期まで行われた虫送りなどの捨場があった。安政５年（1858）（鈴木家文書）

大明神：木舟（貴船）大明神の祠があり、岩瀬の名の由来である岩瀬与一太郎を祀ったものとの伝承がある。

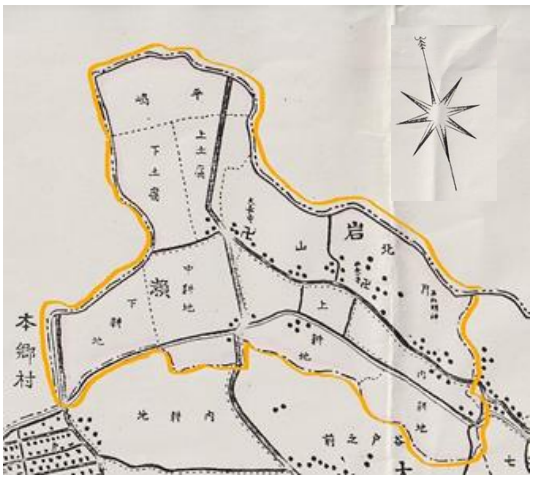
ふじ塚：富士塚山と言われ、万延元年（1860）には富士仙元講中塔が建てられている。岩瀬村・公田村・桂村で富士講を結成している。

不明だが意味がありそうな小名

おけや(桶屋)、小ぢゃ分、土器田(かわらけ田)、うたり、椀免、赤の免、堂免、権現ノ谷、八幡場、神楽畑、じじい畑

なお、先記の鎌倉市史（近世史料編 第一）に書き下されている小名の内、古文書原本を見なおすと、５ヶ所が読み誤りと思われる。八ッ五さ(誤)→八つおさ(正)、高渡(誤)→馬渡(正)、大井分(誤)→大竹分(正)、墾井下(誤)→蟹井下(正)、神原畑(誤)→神楽畑(正)

また、上記の「大長寺領御縄打水帳　田畠帳」天正２０年(1592)にある畠３筆(上　半歩畠、中　大八十五歩畠、上　小四十四歩畠)の小名は「さ口の前」と記載されているが、一方、慶応４年の名寄帳に「元大長寺領　三番　上畑四畝二十四歩　社宮前、二番　中畑九畝十五歩同所」とある。御縄打水帳にある大八十五歩の大とは二百歩のことで、二百八十五歩、即ち、九畝十五歩。また、小四十四歩の小とは百歩のことで、百四十四歩、即ち、四畝二十四歩となる(一畝は三十歩)。従い、この２ヶ所は同じ広さ・等級を示しており、小名「さ口の前」「社宮前」は書下しは異なるが同一場所と思われる。上記の「社宮司」の前の場所である。このことから「社宮司」は天正２０年の検地以前からあった小名と推量される。



大字岩瀬と８つの字　昭和２年
「地番反別入り図」より

４．地租改正後の新たな区割り

（１）「田畑外反別取調帳」　明治８年（1875）

地租改正時に新たに田・畑・宅地・山・萱地等を測量したもの。田は６９０筆から１１２６筆に細分化され、畑は４９４筆から４０４筆に纏められている。（地租改正後、大長寺領分　田２９筆、畑１７筆が加わっている。）

地番　下耕地（1～235）　中耕地（236～509）　上耕地（510～713）　内耕地（714～933）　上土腐（934～1098外）　下土腐（1099～1256）　平嶋（1257～1460）　北山（1461～1722）

地番毎に縦横の長さ・地目（田・畑・宅地等）・広さ・所有者名が記載されている。

（２）「岩瀬邨田畑部名寄」　明治１３年（1880）各所有者毎に地番・田畑の等級（1～5）・地価金が記載されている。

５．小名の場所の絞り込み　○紐付け（例）

慶応４年（小名有り）と明治１３年（地番有り）の田畑それぞれに約４７人の名請人と所有者が存在する。慶応４年（1868）の各田畑の名請人と明治１３年（1880）の各田畑の所有者は概ね同一人であると推量される。

慶応４年の田畑には各筆毎に小名が書かれており、明治１３年の各田畑には地租改正後の地番があり、現在でも地図で場所を特定出来る。各名請人（小名）と所有者（地番）の田畑の紐付けは下記の通り。（４７人の内の一例）

「小名と地番の関係（絞込み）」（表１）

慶応４年	田部					明治13年				
(18)米吉				小 名		(18)□□米吉		地番		
	36	上田	1畝26歩	字 前 田			下耕地	181	4等田	9畝 9歩
	37	上田	9畝10歩	前 田				182	4等田	24歩
	38	上田	4畝16歩	前 田						1反 3歩
	39	上田	4畝11歩	前 田						
			2反 3歩				中耕地	412	4等田	1畝13歩
								413	4等田	5畝23歩
	193	中田	9畝 4歩	下砂押				414	4等田	3畝24歩
	382	下田	20歩	下砂押				415	4等田	5畝28歩
			9畝24歩					416	4等田	2畝10歩
										1反９畝8歩
	475	中田	7畝14歩	かにいと						
								464	3等田	4畝 8歩
	290	上田	2畝 歩	寺ノ前				465	3等田	2畝27歩
	291	上田	1畝21歩	寺ノ前				466	2等田	2畝10歩
	292	上田	1畝 7歩	寺ノ前				467	2等田	1畝 9歩
	293	上田	1畝 8歩	寺ノ前				468	2等田	2畝16歩
	294	上田	8畝21歩	寺ノ前				469	2等田	1畝11歩
			1反4畝27歩							1反4畝21歩
	361	下田	4畝 7歩	うたり			内耕地	754	2等田	4畝12歩
	362	下田	7畝24歩	うたり				757	2等田	4畝 4歩
	363	下田	4畝 歩	うたり				758	3等田	1畝 5歩
	364	下田	2畝11歩	うたり				759	3等田	4畝18歩
			1反8畝12歩					760	2等田	1畝 6歩
								761	2等田	3畝15歩
	18	下田	1畝10歩	今泉古堀						1反 9畝 歩
								825	5等田	1畝 1歩
							下どぶ	1204	3等田	7畝15歩

小名	地番								
下砂押	181		寺ノ前	464		前田	754	今泉古堀	825
下砂押	182		寺ノ前	465		前田	757	かにいと	1204
うたり	412		寺ノ前	466		前田	758		
うたり	413		寺ノ前	467		前田	759		
うたり	414		寺ノ前	468		前田	760		
うたり	415		寺ノ前	469		前田	761		
うたり	416								

「小名と地番の関係（絞込み）」（表２）

畑部										
⑲米吉				**小 名**		⑲□□米吉		**地番**		
	237	上畑	3畝 6歩	**五郎ヶ谷**			中耕地	**299**	3等畑	4畝28歩
	238	上畑	1畝　歩	**五郎ヶ谷**						
	239	上畑	3畝　歩	**五郎ヶ谷**						
	240	上畑	2畝14歩	**五郎ヶ谷**			内耕地	**755**	5等畑	28歩
	242	中畑	3畝11歩	**五郎ヶ谷**						
			1反3畝 1歩					**756**	5等畑	1畝 8歩
	246	上畑	1畝　歩	**屋敷添**						
								816	1等畑	4畝 7歩
	247	下畑	6歩	**川 端**				**817**	1等畑	3畝11歩
										7畝18歩
	254	中畑	1畝15歩	**屋敷添**						
								841	3等畑	1反3畝19歩
	327	下畑	2畝20歩	**砂 押**						
	328	下畑	2畝17歩	**砂 押**						
			5畝 7歩					**885**	3等畑	1畝 4歩
								886	2等畑	5畝12歩
	190	中畑	4畝12歩	**竹ノ内**				**889**	1等畑	2畝 4歩
	193	上畑	1畝14歩	**竹ノ内**				**891**	2等畑	2畝13歩
	194	上畑	2畝17歩	**竹ノ内**						1反1畝 3歩
			8畝13歩							
	210	下畑	1畝22歩	**地蔵坂**						
	211	下畑	7畝11歩	**地蔵坂**						
	212	下畑	1畝10歩	**地蔵坂**			北 山	**1582**	5等畑	20歩
			1反　13歩							
	85	下畑	21歩	**池久保**						

小名	**地番**						
砂押	**299**		**地蔵坂**	**841**		**池久保**	**1582**
川端	**755**		**五郎ヶ谷**	**885**			
屋敷添	**756**		**五郎ヶ谷**	**886**			
竹ノ内	**816**		**五郎ヶ谷**	**889**			
竹ノ内	**817**		**五郎ヶ谷**	**891**			

小名の範囲を特定するために、さらに次の表などを作成したが、ここでは省略する。

○各地番ごとの小名：紐付けを４７人分行って地番毎の小名の表を作成。広さ・等級・前後の繋がり等で妥当性・相当性の高いものを確度Ａ、前後の繋がり等から妥当性が認められるものを確度Ｂ、繋がりのみで判断したものを確度Ｃとした。

○小名見出し資料一覧

【２】―３　洗い出された小名全てをを出典資料別に一覧表にまとめた。本書４ページの表「洗い出された小名」と共通。これらの資料についてご関心がある方は、中央図書館近代史資料担当までお問合せ下さい。

６．図面　小名の分布図（位置と範囲を表示）

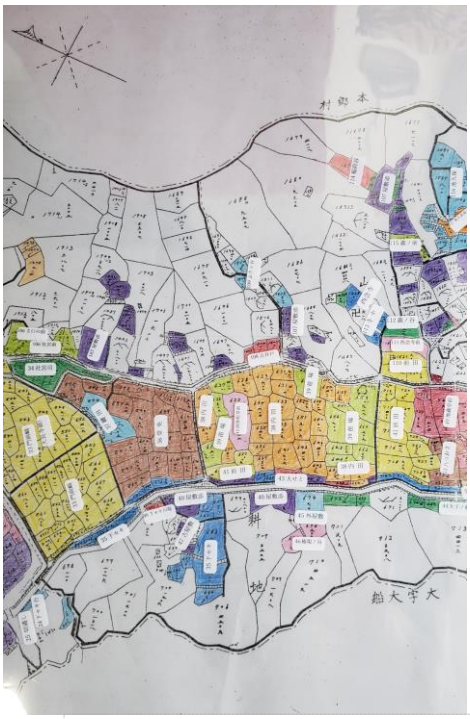
昭和２年出版「地番反別入図」の拡大コピーを下敷きに、１２６の小名と地番を結び付け、小名の位置と範囲を特定した。精度に差があるが、漠然とした範囲ではなく田畑一筆ごとに付けられた小名の姿を明らかにし色分けして見やすくすることが出来た。その一部を紹介する。

『鎌倉近代史資料その２　近代鎌倉の地名』（鎌倉市図書館　昭和５７年）の前書きで「（略）一九世紀後半に改められてから一世紀あまり住民になじんだ地名番地が大きく変えられ、宅地造成で埋められて旧地名も消えて、その位置さえ全く知り得ない姿になってしまった。それを元の場所と重ね合わせて確認することは至難のことであり、それほど意味のあることにも思えなくなってしまった。（中略）いつの日かこれを叩き台にして鎌倉の地名が、いろいろな角度―歴史的・民俗学的―から検討されることを期待したい」と書かれている。昨今『鎌倉の地名由来辞典』（三浦勝男　２００５年）、『鎌倉の歴史　谷戸めぐりのススメ』（高橋慎一郎　２０１７年）が出版され、研究が進んでいるが、コロナ禍の時間を、岩瀬村の小名について、ひたすら調査研究できたことで、少しでも貢献できれば幸いである。（栗田洋二）

大長寺門前に、寺の前、門前崎、さ口の前、社宮司、赤の免、うたりなどの小名がある。

画面左方から字平嶋・下土腐・上土腐・中耕地・下耕地のエリア。五社稲荷、神楽畑、蟹井戸、さがり、土腐、うたり、大道端、離山などの小名がある。

字北山・上土腐・下土腐・中耕地のエリア。大長寺、社宮司、狸塚、土腐、鳥井戸、赤の免、うたり、砂押、小じゃ分、土器田、大船堰、馬渡りなどの小名がある。



図面上方に字北山、下方の田園地帯から右方今泉境に字上耕地・内耕地のエリア。
左図のほぼ中央右寄りに西念寺。下方右から左へ（南東から北西方向）砂押川が流れる。
神明宮、池久保、稲荷谷、瀧の前、屋敷添、ふりヶ谷、内田、苗場、前田、地蔵堂前、阿弥陀堂前、下セキ、八つおさ、入ノ谷、竹ノ内、セキ場、徳利谷などの小名がある。

７．字と小名（まとめ）

①	**字下耕地**　1 離山　2 下砂押　3 みょうがくぼ　4 池下　5 大道端　6 大木下　7 大木下新道　8 やり田 9 大木根　10 上棚　11 大竹分 12 くぼつ田 13 下耕地 14 又幾田 15 おけや 16 新道 17 二反町
②	**字中耕地**　18 砂押　19 小じゃ分　20 土器田　20’かわらけ田　21 みのふ堂　22 砂押萱野仕込　23 大舟堰　24 下セキ台　25 切通し　26 うたり（大長寺領）　26’うたり（岩瀬村分）　27 寺の前　28 赤の免　29 椀免　30 塚田　31 大田　32 内馬渡り
③	**字上耕地**　33 門前崎　34 社宮司　35 下セキ　36 堂免　37 鍵田　38 内田　39 苗場　40 屋敷添　41 前田　42 阿弥陀堂前　43 大せと　44 太子ノ前　45 外屋敷　46 権現ノ谷　47 古屋敷 48 下セキ川端
④	**字内耕地**　49 地蔵堂前　50 白岩　51 八っおさ　52 川端　53 竹ノ内　54 東ノ下　55 東ノ前　56 竹ノ内堀端　57 竹ノ内堀合　58 八幡場　59 セキ場　60 せき下　61 今泉古堀　62 徳利谷　62’徳利谷山ノ根　63 地蔵坂　64 五郎ヶ谷　65 入ノ谷
⑤	**字上どぶ**　66 鳥井戸　67 狸塚　67’むじな塚　68 どぶ　69 上どぶ　70 大門崎 71 定使免 72 宮ノ前
⑥	**字下どぶ**　73 金井分　74 どぶ　75 どぶ長田　76 丸田　77 東　77’東ノ田　78 どぶ塚田　79 さがり 80 外馬渡り 81 沓田　82 蟹井戸　83 四つ辻　84 どぶ太田　85 笠間境　86 東田長町
⑦	**字平嶋**　87 嶋合　88 笠間境　89 平嶋　90 神明　91 嶋合神明　92 宮ノ前　93 坪ノ内　94 公田分平嶋　95 神楽畑　96 宮ノ後　97 辟畑　98 立ノ内　99 石塚　100 石塚山　101 松葉崎　102 立ノ内堀合 103 椎木口　104 大門崎
⑧	**字北山** 105 大長寺持畑　105’小名なし　106 さロの前　106’　社宮前　107 屋敷添　108 辻井戸　109 ふりヶ谷　110 前田　111 西念寺前　112 瀧ノ谷　113 寺中　114 稲荷谷　115 瀧ノ　前 116 池久保　117 池久保森下　118 瀧ノ台　119 腰廻り　120 じじい畑　121 ふじ塚　122 鶴畑　123 白岩　124 前山　125 大明神　126 薬師堂脇

≫鎌倉絵図を再現≪

２０２０年１２月１２日

観光地鎌倉では江戸中期から明治期にかけて名所案内兼お土産用としてたくさんの絵図が出版された。鶴岡八幡宮前、宝戒寺界隈に、１０軒以上の版元が軒を連ねて営業していた。屋号「大坂屋」に残る古い版木をお借りして、明治１２年（１８７９年）刊「鎌倉一覧図」と「安政改正新版鎌倉名所記」を再現してみると、瑞々しい墨色で刷り上がった。

上：秘伝の墨（固形墨を１年以上かけて溶かしたもの）
右：「鎌倉一覧図」版木
下：長年版画を嗜む極楽寺の藤本宿さん　工房にて

版木撮影：島村國治氏

墨を塗り、バレンで圧力を加え、刷り始める

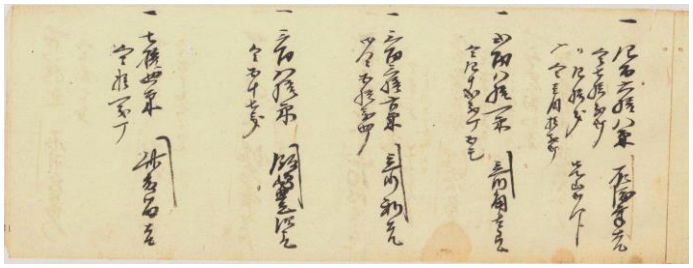
刷りあがった絵図を眺める

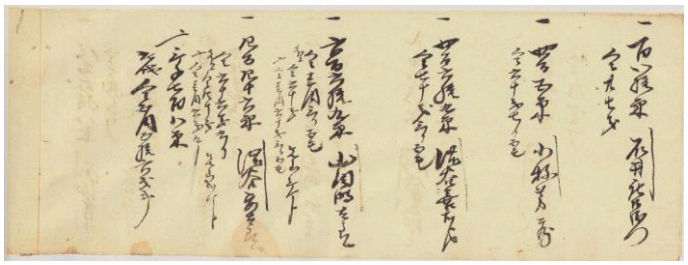
安政改正新版「鎌倉名所記」を刷る

≫古文書紹介≪

二階堂 小牧家文書から

「明治十八年
二階堂村字紅葉ヶ谷 松槙伐帳
三月吉日　三戸村大嶋屋藤吉」





一　四百六拾八束　石渡幸吉
　　金七拾銭弐厘
　　同四拾銭　※先山弐人分
　　メ壱円拾銭弐厘
一　弐百八拾壱束　立川角太郎
　　金四拾弐銭一厘五毛
一　三百三拾六束　立川和吉
　　代金五拾銭四厘
一　三百八拾束　飯嶋豊次郎
　　金五拾七銭
一　七拾四束　斎藤留吉
　　金拾一銭一厘
一　百八拾束　石井庄左衛門
　　金廿七銭
一　四百五束　小牧芳蔵
　　金六拾銭七厘五毛
一　四百六拾九束　渋谷喜右衛門
　　金七拾銭三厘五毛
一　六百六拾九束　山田時太郎
　　金壱円三厘五毛
　　外二金六十銭　※先山三人分
　　メ金壱円六十銭三厘五毛
一　四百四拾六束　渋谷要太郎
　　金六十六銭九厘
　　外二金四十銭　※先山弐人分
　　メ金壱円六銭九厘
　　メ三千七百八束
　　此伐金五円五拾六銭弐厘

＊山の松の木の枝などを伐採して薪（槙）として売っていた記録が残っている。※「先山」は、木を伐採する仕事。他に木挽、杣夫、山出しなどの山仕事があった。炭焼きなども行われていた。

≫図書館デジタルアーカイブ≪

鎌倉市図書館は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため２０２０年３月から６月まで休館となりました。この期間、近代史資料室では、休館中でも利用者のみなさんに継続して情報提供サービスを行うため、当資料室刊行の一部資料を図書館ホームページにデジタル公開しました。今回令和２年度（２０２０年度）にデジタル公開した資料をご紹介いたします。

図書館ホームページから**下記の方法で閲覧できます。**

■近代史資料室＞刊行物＞その他
☆近代史資料室＞催し物＞過去のイベント
◎近代史資料室＞収蔵資料＞デジタル資料「こちらから」
をクリックし、資料の種類 を選択して「集計」をクリック
または
鎌倉市図書館トップ＞探す・予約する＞デジタル資料
をクリックし、資料の種類 を選択して「集計」をクリック

令和２年度（2020 年度）　図書館デジタル公開資料一覧

タイトル	作成年	内容
■「鎌倉・太平洋戦争の痕跡」	平成16年(2004年)3月 CPC の会と共著	地元の人の案内による陣地の調査や戦争体験談、209P
■「鎌倉アカデミアの軌跡」	平成18年(2006年)5月	平成 18 年（2006 年）5 月、材木座光明寺にて開催した展示の記録、88P
■ 写真展「古都鎌倉へのまなざし」記録集	平成20年(2008年)7月、69P	平成 19 年度（2007 年）展示会の記録集。安田三郎氏（元鎌倉国宝館カメラマン）撮影写真（約 130 枚　昭和 20 年代～40 年代）と明治・大正・昭和の鎌倉（市内外約 200 名の方から提供された写真）の２部構成。
■ 写真展「古都鎌倉へのまなざし」記録集（続）	平成20年(2008年)12月、46P	
■「第 18 回オリンピック東京大会～聖火リレーと鎌倉市の取り組み～」リーフレット	令和 2 年（2020 年）8 月	「東京オリンピック 1964」の鎌倉市の様子を当時撮影された写真や新聞記事等で振り返る。9P
☆ 平成 25 年度　郷土資料展「90 年前の関東大震災と鎌倉－震災写真から見えるもの－」パンフレット	平成25年(2013年)9月	図書館多目的室で開催した展示の記録、鎌倉在住の写真家が撮影した鎌倉町の被害状況写真や町役場の記録資料の紹介、4P
☆ 平成 29 年度　特別展示「関東大震災－空からの記録を読む鎌倉・湘南・三浦」パンフレット	平成29年(2017年)9月	図書館多目的室で開催した展示の記録、被害状況を撮影した航空写真の紹介、8P
◎ 関東大震災被害写真 資料の種類「震災資料」		関東大震災の被害写真に「内容紹介」の項目を追加し、「解説」と『鎌倉震災手記』からの詳しい説明を掲載。
◎「絵葉書」261 枚 資料の種類「絵葉書」		明治・大正・昭和の絵葉書
◎ 相模国鎌倉郡神社仏閣彩色境内図 27 図	令和 2 年（2020 年）9 月	鎌倉市内の 9 神社・18 寺院の明治初期の彩色境内図
◎ 晩翠吟社詩稿 11 冊	令和 3 年（2021 年）3 月	田辺松坡が所蔵した漢詩会晩翠吟社の月例会での会員作詩原稿

古写真

藤沢市　山下延子氏提供

―　鎌倉泉ヶ谷に住む貿易商の庭　―

大正８年５月

今も静寂を保っている扇ガ谷の奥、泉ヶ谷は、古刹浄光明寺を中心に、文士や実業家が好んで住んだ谷戸である。谷戸奥には「泉の井」も現存する。付近にはかつて「扇洲園」という造園家の庭もあり、近所の人が自由に散策していた。写真の家にも庭一面にめずらしい植物が植えられている。写真所蔵者山下さんのお話では、この邸の主人は、薬種の貿易商で植物が大好きであった。「サカタのタネ」の初代もここで書生として学んでいたという。主人は、この場所の立地がとても気に入って、夕方には山の端から月が上る様子をこよなく愛した。関東大震災では被害を受けたが、のちにこの場所には著名な鎌倉文士が住んだ。

少女時代、ここで過ごした山下さんの母上静子さん（明治３６年生まれ）は、とても優雅な文章でこの谷での日常を綴っておられる。

［鶯谷日記　青柳静子］

（大正７年夏季休暇日誌　女学校３年生）

手作りの本の表紙には、草花の絵が描かれている。

七月二十一日（日曜日）天気晴

夢路の闇から脱した私は心地よい朝風にさそはれて、夏草茂る小川のほとりをさまよった。どくくしい色をした穂の様な花を青い葉かげにかゞやかせた。ちりとほこりでうづめられた、みにくい世界につれ込むようないやな臭を、かなり遠くまでたゞよはして、それをも自分ではほこらしげに咲いていたアカシヤの花もいつとなく散り失せて、あとには只青い葉のみがやはらかい夏の光をからだいっぱいにあびて、茂り合っている。あゝ、いよいよ今日から夏休みだ。―かう思ったら、今まであんなにたのしみにしていたのが、不思議な位なんだがお休みがつまらなくなって学校がなつかしくなった。それでも床の間に程よく赤くなった錦木をいけてすっかり掃除も出来てしまった後には朝の不平もわすれたやうに涼しいお座敷の縁先で読書に時をうつした。昼御飯をたべて又よみさしの本をひもどく。暑い夏の日は絶えず表の桐や柿の木にてりはたゝいて居る。一しきりなまぬるい風が吹いてあとは木の葉も動かない。蟬の音まで急にやんだ。ひたひの汗はいくらふいてもつきない。奥のおざしきからお父様のいびきの声がかすかにきこえる。私は本をとじてぢっと前の青田を見つめた。と思はず堪へがたい眠気に訪はれて思はず机の上に伏してしまった。ふと目をあけた時は、早日は西の方にかたむいていた。夕飯後お父様と蛍狩りに行く。小川の流れにそって足をはやめている内にいつしか

十六の井戸の傍に出た。と山の中にも木の梢にも草の上にも田の中にも天地のあらゆる所に地の星とも思はれるほたるのそのやさしいささやきは、とりかはされていた。私はとってしまふのがおしい様な気がした。そして自分では一匹のほたるにも手をふれなかった。しばらくしてほたるかごをもった私とほうきをおもちになったお父様とが帰途についた頃出かける時には松の梢にかかっていた月がもうずっと高く昇っていた。

七月二十二日（月曜日）天気晴

蛍の光が草葉におさまると夏の夜もほの〳〵と明け離れた。朝御飯を食べた後、お姉様にお薬をさし上げて、それからすが〳〵しい風鈴の音の下で御無沙汰したお友達の方々にお手紙したゝめた。ただでさえこんなにあついのに九度以上の熱で床にふせっていらっしゃるお姉様はどんなにおくるしいであろうかとこう思って自分のからだの健康なのを感謝し又お姉様の御全快をいのった。午後からはぬいかけの単衣をとり出して縫い上げる。出来上った着物を見て思はずほゝえんだ。これをきたならばどんなに涼しいだろうと思って…やがて蜩の一声にさしもの長い夏の日もくれて夕も訪づれた。そして又つゞいて夜もせまって来た。きくともなしに耳をすますと遠くに玉うつ蛙の声、軒につるした岐阜提灯のほの白い光がふくともしなき夜の風にかすかにまたゝている。

七月二十三日（火曜日）天気晴

山も森も林もまだ夜の衣におほはれている頃野路に出た。をちこちの山かげには蜩のさわやかな声さへふるへている。やがて太陽がかゞやきそめたので家に向った。朝げをすませた後、松風涼しい若宮大路を海に向ふ。ひた〳〵とよせてくる水に足をひたしたり美しい貝をひらったりして二時間ほど遊び過ごす。その内時もうつしたのでつかれた足をひきづりながらやっとの事で家につく。海から家まで三十分以上もかゝった。足は棒のようになった。やがて萩の葉渡る夕風に、せみのおともはたとやんだ。「ゴーン〳〵」―裏のお寺のかねの音がひゞく。私は散歩にふみなれた野路をさまよった。どこからかゆかしい横笛の音がもれて来た。そして静かな夕の空にひゞいて小川の水の上に流れるように消えた。と又すぐ笛の音はつゞいて起った。静かだ。宵の里はあくまで静かだ。―静かな夏のひと夜。―ふけ行くままに笛の音はつゞいた。

七月二十四日（水曜日）天気晴

彼方の果てより此方の隅まで空は一点の雲もなく、あいを流したようにはれ渡ってそよ吹く風は涼しく初夏のひゞきをつたへている。風通しのよい花小屋で花にとりかこまれて読書に時をうつした。やがてしきりにないていた蟬の音もやんで夕べとなった。縁につるした岐阜提灯の灯が夏の夕べをかたるように静かに静かにまたゝいている。小鳥の一群が家々に別れを告げて源氏山の彼方にとびたった。　（後略）

七月二十九日（月曜日）天気晴

青葉のしげみにふき渡る風の音に終夜めざめがちであった一夜もうす紫のもやが次第にうすれて行くのにつれて、明けはなれた。がけ下にはひ出ている長い夏草はよべの名残の白つゆをおびてうつむいている。一日中裏山の麓の桐や柿や栗や梨や槙、石榴等に宿するほとゝぎすの声をきゝながらくらす。うぐいすのこえがもれてくる事も折々ある。何となく春の様な心地がした。昨夜にくらしいねずみにおそはれたらしく、紅すゞめが二羽かごの中にあはれな姿を横たへている。すぐに弟がどこからかよい石をみつけて来たので山のふもとにおはかをたてそこにうめてやった。そしてお線香を立てお花などをそなえた。夕もやがうすくたちこめて街がしづかにくれかゝる頃叔母様と弟と三人で家を出た。かえって後床についたが妙に目がさえてどうしてもねむれないので枕もとにおいてあった少女世界（＊）をとってひもどく内、いつしか夢路をたどっていた。

八月十二日（月曜日）天気晴

そよ〳〵と心の奥まであらう様な風が緑の梢を動かすとさや〳〵と音をたてて、五六枚の葉がしめつぽい地に落ちた。朝小田先生からおなつかしいおたより…。心にかけていた『梨の花』（＊＊）

を送ったとの御事。うれしくて〳〵何もせずに只小包のくるのをまっていた。十一時頃小包は来た。早速よみはじめて昼までよみふける。午後用事のため長谷に行く。夜は又御母様と弟と三人で劇場（＊＊＊）に行く。

八月十七日（土曜日）天気晴

朝早く起きて裏の畔路に出た。そよ〳〵とふいてくる風は一入心地をさわやかにする。木の方では蟬や小鳥が面白い音楽をかなでている。それにのってあたりの草木もおどりだしそうな風をしている。私はすんだ青い空を仰いで深呼吸をして、それから花壇の桜草やガーベラやサルビアに水をかけてやった。あたりは人々の往来も絶えて只やかましいせみの声のみにみたされているまひる頃、私は又カラカラと白い小石の上を歩んで池のほとりまで来た。涼しい風は絶えず顔のほてりを洗って向うの森へ去って行く。そしてその後は木の間からたくさんのとんぼがとんでくる。少しの動きもないお池には浮藻が一面にながれて金色の金魚が思い〳〵に泳いでいる。まがきの真紅のばらがいくつも〳〵愛らしい影を落している。私は傍の笹をとって笹舟をうかべた。そして美しい景色にみとれてうっとりと様々の記憶の糸をたどるのであった。

九月二日（月曜日）天気晴

青葉の間から訪づれる風は絶えず軒の風鈴にチリン〳〵と涼しげな音を立たせている。お父様は弟をつれて釣にいらっしゃった。十二時半頃小さな魚をたくさんつってかえっていらっしゃった。上野様石橋様からお手紙がくる。夕方お母様はお姉様とよこすかへいらっしゃる。お父様と扇州園に行く。白いぎぼしが美しくさいたのでガラスの花瓶に二三輪さした。

九月五日（木曜日）天気晴

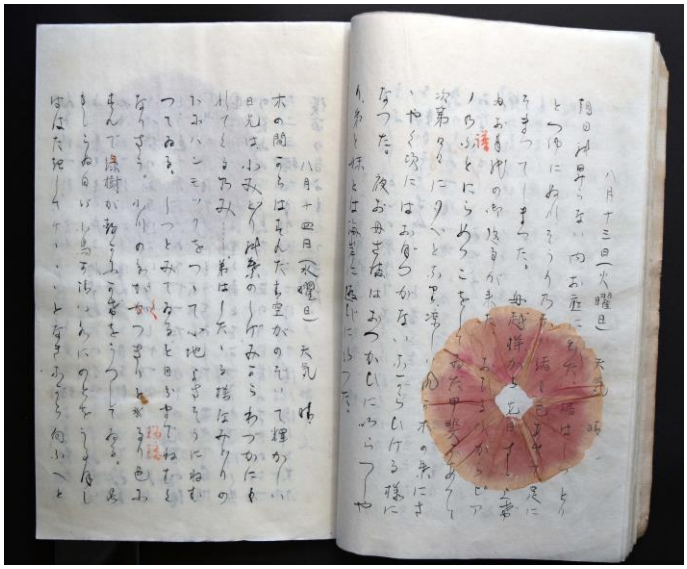
朝早く起き出でて裏山にのぼる。梢にさわがしい蟬の声をきゝながらけはしい山路を辿って行く内、いつしか冷泉為相の御墓のほとりに出た。おまいりした後、涼しい松影で雑誌などよんでいる内に日もかゞやきそめたので真紅の萩の一枝を手折って家にかえる。午後御兄様は横須賀へおかえりになる。夜はお母様弟妹と共に八幡前に行く。

（注）

＊「少女世界」…博文館発行の少女雑誌。編集発行は巌谷小波。明治３９年―昭和６年

＊＊「梨の花」…吉屋信子「花物語」の一篇か。

＊＊＊「劇場」…大正６年に長谷通りに面した畑の中に建てられた当時珍しい本格的な劇場。歌舞伎や芝居を上演していた。「鎌倉劇場」のちに「松竹劇場」と言われた。昭和３６年３月に焼失した。



ある日の日記

（日記概要）

○大正７年７月２１日（日）から９月８日（日）まで、毎日綴られている。その一部を翻刻掲載した。

○ページには朝顔の押し花が貼られている。今も美しく色鮮やかである。

○赤鉛筆で先生の字句修正が入っている。

○その他に静子さんの書かれた日記「紫露集」、姉琴子さんの随筆「小さきおくりもの」などを御寄贈いただいている。

【参考資料】

・柴田泉『鎌倉の西洋館』コロナブックス　２０１１年

モニュメント⑦

ドイツカシワの木

笛田公園の隅に背の高い柏の木が立っている。その木は、今から８５年前（１９３６年）、ドイツで行なわれた「第１１回オリンピックベルリン大会」に因むものである。優勝者にはメダルと共にシュワルトバルツの森から採取したドイツ柏の木の苗木が贈られた。陸上競技三段跳びの田島直人氏は１６メートルを跳び優勝した。帰国後母校の京都大学に植樹し、その苗（ドングリから育てた）が、ここにも植えられている。鎌倉在住の関係者で作られた「鎌倉ベルリン会」には５名の鎌倉在住オリンピアンの名前が記されている。田島氏は晩年鎌倉に住まわれ、記念樹は田島氏没後、１９９９年にベルリン会矢沢正雄氏、田島麻氏（女子短距離選手・田島直人氏妻）から贈られ植樹されたものである。

台風などの被害を受けながら今も運動場を見守っている。

《鎌倉ベルリン会メンバー》

佐藤秀三郎（第１１回ベルリン大会マラソンコーチ）
田島直人（第１０回ロスアンゼルス大会走り幅跳び・第１１回ベルリン大会走り幅跳び・三段跳び）
田島麻（第１０回ロスアンゼルス大会女子短距離）
矢沢正雄（第１１回ベルリン大会短距離）
石川秀（第１１回ベルリン大会女子円盤投げ）

【参考資料】

・「東京朝日新聞」昭和１１年８月７日
〝オリンピック大会第六日　三段跳びに一、二等獲得　田島十六メートルを跳んで　驚異的の世界記録〟
・「東京朝日新聞夕刊」昭和１１年８月８日
〝世界制覇成って祖国に贈る感謝　田島を祝福する織田〟（東京　大津寄　昇氏提供）
・小山尚元著『栄光の樹：ベルリン五輪三段跳びの覇者田島直人』

〈追悼〉　近代史資料室に、毎週のように笑顔で訪れていた加藤茂雄さんが２０２０年６月に亡くなられた。９４歳だった。長谷にある江戸時代から続く網元「長四郎網」の分家に生まれ育ち幼いころから漁師の手伝いをしていた。戦後、光明寺に開校した鎌倉アカデミア演劇科で学び、その後は東宝に入社。黒澤明監督の作品をはじめ様々な役を演じた。大正・昭和・平成・令和と４つの時代を見てきた加藤氏はご自身の体験談を臨場感ある言葉で私たちに話してくれた。加藤氏が９２歳の時、仲間たちの協力のもとその貴重な昔話の一部をまとめた絵本『茂さん』が出版された。また９３歳の時、映画「浜の記憶」で初主演し、地元鎌倉を始め、新宿、横浜、京都で上映された。記憶力のいい加藤氏の昔話が聞けないのが寂しい。

２０１７年５月
「茂さん－鎌倉長谷のむかしむかし」出版会

≫インタビュー（むかし語り）⑦≪

笹目の谷に住んで

お話：中山尚彦氏

令和２年（２０２０年）１０月１７日（土）
鎌倉別荘地時代研究会にて

笹目ヶ谷の別荘

今の場所に私が住んだのは昭和２０年からですが、笹目の谷で一番古い人になってしまいました。明治２０年代末、祖父がここに別荘を建てて住み始めましたが、関東大震災で一度つぶれています。島本先生の『別荘物語』に出てくる明治時代の４軒の別荘は、私の子ども時代から昭和５０年代までは全部ありました。そして６０年代に全部無くなりました。

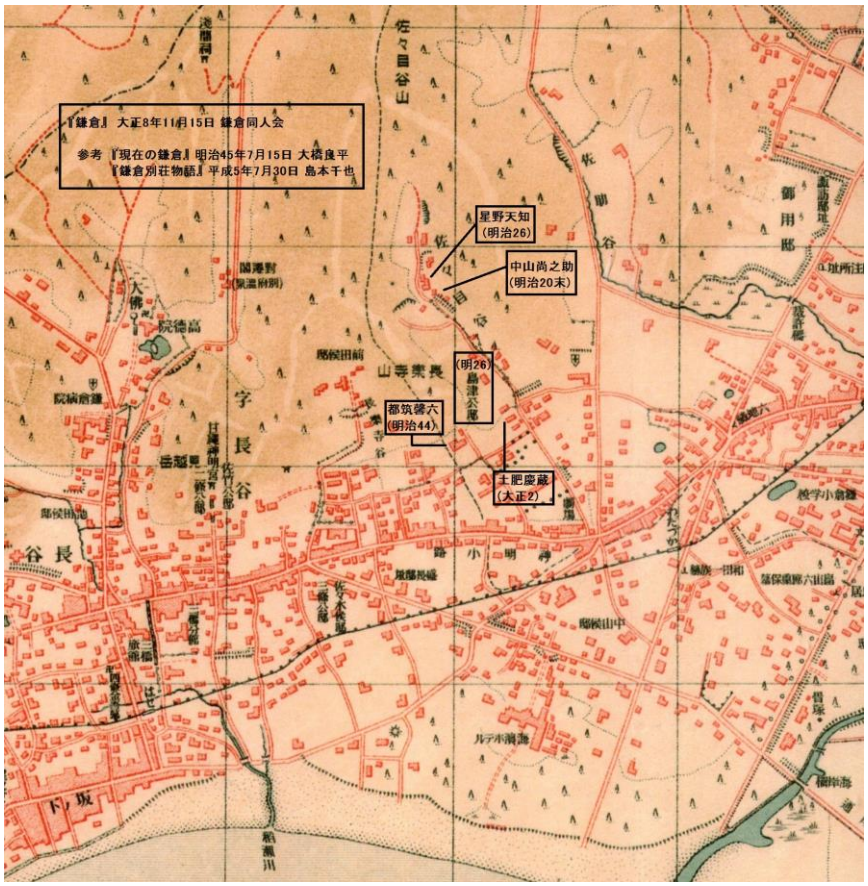
三井さんの別荘（元医師土肥慶三邸）は前の芝生が広くて平らで、子ども心に、ヨーロッパかアメリカにありそうな、気持ちがいいところだなと思いました。（＊）

三井家別荘

その西側の都筑（馨六）さんの家は、叔母と一緒に中に入ったことがありますが、なんだか暗い感じの日本家屋でしたね。

島津さんの建物は洋風の、森の中のお屋敷といった感じで、近所の子どもたちの遊び場でした。

最後まで残ったのは星野（天知）さん。もう壊すというときに中を見せてもらいました。何もなくてガランドーでしたが、立派な柱で、あと１００年は残ったと思う。残念です。残す方法がなかったのかなと悔やまれます。代表的な明治初めの家でした。（＊＊）



中山の家のあたりは谷の中にもう一つ谷がある感じで、その谷と山を崩して御成中学のグランドが出来ました。

今、笹目ガ谷では、５軒の別荘が分譲されて約１００軒の家ができています。若い人が増えて、それなりに意味が有ったのではという気がしています。当然と言えば当然かという気もしますが、残念なこともあります。

最近、斜め向かいに新しい家が２軒建ちました。そこには横浜の富豪が建てた、６０坪だが立派な日本家屋と庭がありました。十分に住める家なのにと残念でした。

日本では売買される家の８割が新築、中古は２割。ヨーロッパでは逆です。不思議だ、残念な現象だと思っています。ある本に、日

本人の心情に「穢れ」という観念があると書いています。例えば仲のいい父と娘がいて、父親が娘に「お箸をやろう」というと娘は「いやだ」と言った。心情的にそういうことだなと思いました。

子どものときの遊び

山で遊びました。昭和２０年代の初め、藪をかき分けて佐助稲荷から葛原ヶ岡まで行くことは、よくありましたが、ある時梶原方面まで行きました。山また山の深い林を行くと、突然前が開けて明るい場所にたどり着き、そこに大きな洞窟がありました。そこには家族が住んでいましたが、びっくりして引き返しました。今考えると、山で暮らしている「サンカ」という人たちではなかったかと思います。山で暮らすのは、日本人の原型の一つです。少なくともアイヌ文化は保存されていますが、この山の民の文化は保存されていないようです。

祖母の家が鎌倉山にあったので、昭和２５年２６年の２年間過ごしました。鎌倉山の家は、５００坪単位で売り出された、ゆったりした敷地でした。昼間は１時間か２時間に１本しかないバスで旭丘から御成小学校へ通っていました。歩いた時もありました。時々、打越で降りて、山に登り、菅原通斎さんの美術館の脇を通り、病院の横へ出ます。子どもなので、病院の中をおそるおそる通っていました。そのうち病院を通らないで行ける道を見つけて、長尾美術館の庭に入り込んで門から出ることを覚えました。中から木戸の内カギを開けて出たんです。その後長尾美術館は「鎌倉園」という料亭になっていました。２７歳で結婚した時、そこで結婚式をしました。おかみさんに頼んだら「やったことはないけどやってみましょう」ということになって。今「扇湖山荘」と言って庭だけ開放していますが、立派な家で、中に入らないと良さがわかりません。思い出の建物です。

もう一つ下り専門の好きな道がありました。旭丘から道なき道をかき分け降りていくと、谷間に川が流れていて、子ども心にもほっとするような静かな場所がありました。里山ですね。そのあたりはその後西武系が買い、七里ガ浜の大きな分譲地になったのです。

ファミリーヒストリー

明治に、ここに別荘を建てた**祖父中山尚之介**は、日本銀行員でした。島津さんと、この谷を歩いて気に入り、この辺に別荘を建てようと話したそうです。出納局長の時、部下が問題を起こし、その部下は切腹自殺をしました。尚之介は上司として局長でやめました。

日銀時代に建築家辰野金吾と交流があり、尚之介の長女と辰野家の次男が結婚をしました。

辰野金吾は唐津出身で、「英語学校」で学び、そのときに招かれた教師高橋是清と出会います。その後東京へ出て、工部省工学寮に入ります。入学の時は最下位でしたが、努力して卒業は首席でしたので、褒美にイギリスへ留学しました。帰国後大学で教え、のちに辰野建築事務所を立上げた近代建築の草分けです。日銀本店を建てる時、日銀の側から中山が窓口となり、仕事の話をしているうちに、個人的な縁ができたのでしょう。

辰野さんの息子さんで、長男隆（ゆたか）さんは東大仏文科を出たフランス文学者ですが、父金吾がスペイン風邪で亡くなった様子を「終焉の記」に書いています。「実に汝は良き妻なり良き母なり・・・」と言って万歳を連呼したという。近代日本の先駆けはそんなような人だったかと。次男の保さんは、筋骨隆々とした人で、東大時代には陸上競技で砲丸投げ、ハンマー投げの選手で、昭和１５年オリンピックの招致委員長でした。墓は新宿の常圓寺。和尚さんにうかがうと、保さんがお寺に来ると、最初に逆立ちをした。和尚は子ども心に驚いたと言っていました。ご住職は古代インドの言葉を立正大学で教えていたようです。

その保さんの奥さんであった叔母は８６歳で、笹目に家を建てて住みました。結婚したとき、保さんに別にお子さんがいたのを知らず、

叔母が後年になってぶつぶつ言っていたには、「私だけが知らなかったのよ」と。

金吾さんも　時々「旅行に行く」と言って出かけるのですが、奥さんは承知の上で子ども用のオモチャを荷物に入れてあげていたという。その時代は第２夫人、第３夫人がいたんですね。

叔母が亡くなった後、金庫を処分することにしました。開けてみると満州重工業の株券、短刀（嫁に行くとき母から渡された。耐えられなかったら死んでかえっておくれ）。辰野家では厳しく仕込まれたようです。次にピストルです。鎌倉警察に連絡したら、警察官がどやどやと来て、「どこにありますか」「出してください」と言うので、風呂敷包みを開けました。それまでピストルの実物を見たことがなかったのですが、見ると実にきれいだった。製造販売元に国友銃砲店と書いてあり、戦国時代から続く国友鍛冶の伝統が伝わっていると思いました。

曽祖父尚之介（中左衛門）　日銀の尚之介の父親です。

初めは島津斉彬の小姓かなにかだったんですが、斉彬死後、遺言で弟の久光の息子に家督を譲ることになり、久光にその後見をしてくれと遺言したそうです。久光は中央へ出たいという意志を持っていましたが、初めは保守的な家老たちが、中央へ出るなと抑えていた。久光は彼らをやめさせて若手を抜擢しました。側役として大久保利通と中山尚之介が務めたそうです。しかし生麦事件、薩英戦争と続き、実質的な敗戦で、責任を中山が取ったのでしょう。それからは桜島の地頭に転じて静かにしていたようです。しかし西南戦争のあと（明治１０年末）、大久保の暗殺を企てたという嫌疑をうけ逮捕され翌明治１１年１月、熊本監獄で毒殺されたということです。その４か月後大久保は暗殺された。犯人は石川県士族というが、なぜかよくわかりません。そういう死に方をしたのが私の曽祖父です。私の父は昔のことは話さない人でしたから、詳しいことは聞いていません。

母方の話を少し。母の父は眼医者の宮下左右輔と言って静かな学者生活で終わるはずだったのが、離婚問題が一大スキャンダルになり、「主婦の友」がセンセーショナルに取り上げ、妙に有名になった。奥さんのあきさんが藤原義江に惚れ込んで不倫事件となった。藤原義江さんは、格好も良いが話題が豊富で話が面白くて引き込まれる人でした。

母は私が１２歳の時、３６歳で死んでいるので思い出はあまり無いが、女子学習院時代の話を少し聞きました。母の妹は、６５歳で再就職して国家公務員特別職、昭和天皇の皇后の女官になった人です。新嘗祭で、天皇が神殿の中でお一人だけでお祭りされる際に、神殿の中でお手伝いをした時には、直前に潔斎（風呂に入って出たら他人に体をふいてもらう）など伝統的なしきたりにしたがわねばならなかった話を聞き、民間から宮中に入られた美智子さまや雅子様のご苦労が想像されました。

（おわり）

＊三井家別荘

「神奈川県近代洋風建築調査報告書」（神奈川県１９８８年）より

（付記）建築家辰野金吾の下で日本銀行本店新築工事主任を務めた山本鑑之進は中山の妻の妹と結婚し縁戚関係にあった。山本も晩年は、鎌倉の中山尚之介別邸で療養した（関東大震災前）。（金田美世「大阪府立中之島図書館棟札に記された現場係木内真太郎とドーム天窓について」参照）

＊＊

星野家全貌

（明治期）

破蓮堂笹目山荘図
星野天知『黙歩七十年』より

寄贈資料紹介

令和２年度（２０２０年度）寄贈を受けた資料・高階家文書（高階氏）／旅館「天松」重箱（元松氏）／鎌倉カーニバル旗他（澤井氏）／鉄兜（山田氏）／折り紙お手本１１箱（郷原氏）／結婚式誓詞他（矢澤氏）／鎌倉プラン研究会資料（菅氏）／向陵塚一高関係資料（工藤氏）／「鶯谷日記」他（山下氏）／「菊池香一郎詩集」（友田氏・寺﨑氏）／第八回実科高等女学校卒業写真（石渡氏）その他

【向陵塚・一高関係資料】

東慶寺境内に「向陵塚」記念碑が立っている。第一高等学校同窓会が向陵塚を維持し、さらに市内在住の工藤康氏のもとに記念誌など関係資料が長年にわたって収集されている。地元図書館に寄贈して閲覧し易くしたいというご希望があり、鎌倉市中央図書館でお預かりすることにした。工藤氏の作成した９２点の正確な目録とともに、写真のような古めかしい書棚まで一緒だった。

この書棚は、一高で戦前１２年間英語の教鞭をとられたベル先生のものだ。イギリス、ケンブリッジ大学を卒業し、昭和４年に来日し、一高の英語講師として赴任した。しかし昭和１６年に敵性外国人として４年間キャンプに収容された。戦後は小石川高校、アテネフランセ等１７の学校の講師を務めた。しかし昭和５１年、経済的な困窮と体力の衰えで半世紀の教師生活を終え夫人とともに帰国した。先生の困窮を知った一高などの教え子たちが餞別募金運動を始め、当時の新聞にも「名物英語教師、近く帰国」と取り上げられている。書棚には卒業生の記念誌や書籍がきちんと納まっているが、このほかにも段ボールに入った寄贈資料がある。向陵塚関係史料／向陵誌／第一高等学校自治寮六十年史／寮歌集／嗚呼玉杯／運るもの星とは呼びて／篝火／風荒ぶ曠野の中に／学徒出陣―星霜五十年／春尚浅き／嗚呼向陵―わがたましひの故郷／一高歩く会隔年報／一高寮歌祭・駒場の想い出／化学史　その黄金時代／真の教育者・杉敏介先生／追想木村健康／竹山道雄と昭和の時代／日本野球創世記／朶寮一番室―谷崎純一郎と一高寮友と／橄欖樹／わが向陵三年の記／一高ロマンス／日本戦没学生の思想／雑誌「向陵駒場」等々

【後記】

コロナ禍は続き、マスク、手洗い消毒、ディスタンスを守りながら慎重に生活している。多人数の集まりは中止が多い。研究者の中には、「時間が出来たので読書や研究に集中できる」と言う声も聞かれる。

資料室では、日常業務である資料整理・資料提供や「歴史的公文書」の評価選別作業を行いながら、別荘地時代研究会・古文書の会などを、館外の福祉センターや公民館の広い部屋を借り、人数制限しながら続けてきた。フィールドワークが中心の「ＣＰＣの会」も、市内の庚申塔再調査に取り組んでいる。さらに過去の写真展や図書館ツイッターで好評を得た写真を「写真集」にまとめるという計画に向けて、ボランティアの方たちと会議を重ねてきた。不安な毎日が続くが、慎重に取り組んでいきたい。

「近代史資料室だより」第７号
発行　鎌倉市中央図書館
近代史資料担当